

3. 関西学院大学考古学研究会部室残置の遺物類について

藤原光平

本書では、関西学院大学考古学研究会（以下、考古研）でかつて保管され現在は各自自治体に移管された資料群の報告をおこなってきたが、それら以外に、本報告時点で自治体への移管ができていない、もしくは出土地不明のため残置せざるをえない遺物群が存在している。さらに、出土遺物以外にも調査記録として作成された各種図面類が現在も部室に多数残置されている。

これらの資料群については、今後さらなる整理が進み、新たな調査時の情報が見つかることにより移管がなされる可能性も考えられ、また図面については未報告の貴重資料も存在し学術的価値も無視できないものがあるため、現時点で確認できた残置資料の内、主だったものの概要について報告する。

報告に際しては、遺跡の所在する自治体ごとにまとめて列記することとする。なお、各資料の内容を1点ずつ報告することは紙面の都合上困難であるため、遺跡ごとに内容の概要を報告することとする。

遺物の概要

①西宮市関西学院大学構内古墳出土資料

関西学院大学構内古墳出土資料については、前述の報告にもある通り、大半の資料は西宮市に移管している。しかし、移管作業後に考古研部室において「K.G. オク」「34.3. ●」等と注記された須恵器片2点及び鉄製品資料群が新規で発見された。

須恵器片については、坏の破片と器種不明の頸部片がそれぞれ1点ずつ確認できた。一方、鉄製品資料群は小袋79個に分けて保管されており、各袋には上記の注記とともにに取り上げ番号と考えられる数字が記載されている。鉄製品の内容は古墳時代の鉄鏃と考えられるものが多数を占め、その他、鉄釘と思われる資料（時期不明）も混在している。その鉄鏃については完形の資料はなく、刃部・頸部・茎部・関部の各部位の破片資料が散見される。各部位の形状をみると、刃部は片刃の型式が、関部は突起が左右につく棘状関と考えられるものが確認できる。

構内古墳の出土遺物については、『関西学院考古』第2号で報告されており、鉄鏃は4点出土と記載されているが、詳細については記されていない。

残されている鉄鏃資料の刃部の点数は報告されている4点以上あるため、確実に構内古墳出土資料と判断することは現状では困難であり、今後さらなる検討が



関学構内古墳出土須恵器



関学構内古墳出土鉄製品①（遺物右下の数字は取り上げ番号）



関学構内古墳出土鉄製品②（遺物右下の数字は取り上げ番号）

必要であると考え。

ただし、これまで実態が不明であった構内古墳の鉄製品である可能性がある資料が発見されたことは、古墳の内容を考える上でも非常に重要であると考えられる。

②宝塚市長尾山丘陵の各古墳群出土資料

宝塚市の長尾山丘陵には数多くの古墳群が立地しており、考古研が長年測量調査などを精力的に実施してきたフィールドである。それらの古墳群から出土したと考えられる須恵器や鉄製品等の所蔵資料の大半は宝塚市に移管したが、「雲雀丘出土」と注記された資料が入ったコンテナ 1 箱分の鉄器資料が現時点で未移管である。

これら未移管資料の内、鉄刀 2 点や鉄鏃 3 点などは『関西学院考古』第 10 号で報告済である（真田・藤原 2007）。詳細についてはそちらの報告に譲るが、鉄刀は残存長 34.0 ～ 35.5 cm を測り、鉄鏃はいずれも長頸式で三角式独立片逆刺三角形長頸鏃が 1 点、腸扶柳葉式長頸鏃が 2 点あり、時期が比較的限定される貴重な型式である。

また、今回の調査で前述の報告に記載されていない資料が存在していることが判明した。その内、「HBW」という注記のついた須恵器片や、「雲雀丘 C37 号」という注記のついた遺物群（鉄器と人骨片）がある。

須恵器片は 9 袋あり、甕の破片が多数を占める。「HBW」という注記から雲雀山西尾根古墳群内の古墳から出土したものと考えられる。1972 年に行われた雲雀山西尾根 B2 号墳の発掘調査では石室南東隅に多量の須恵器甕破片敷いていたことが報告されており、それらの資料に該当する可能性が考えられる（註 1、宝塚市教委 1991）。

「雲雀丘 C37 号」という注記のついた資料としては、鉄器片が数点あり、中には鉄刀の鏑と考えられる破片も見受けられる。人骨は歯が付着した状態の顎部の破片が 2 点ある（註 2）。



雲雀山西支群 B1 号墳出土？須恵器



雲雀丘古墳群西 C37 号墳？出土遺物（上：鉄製品、下：人骨）



雲雀丘古墳群出土馬具



出土地不明（2号墳出土）鉄製品

さらに、「雲雀丘古墳群出土」というカードが入った各種馬具製品が存在することが確認できた。いずれのものも完存はしていないが、直径 9.0 cm ほどの環状鏡板 3 点と引手の破片が数点、さらには兵庫鎖と推定される破片が 1 点確認でき、これらが同一個体とすると環状鏡板付轡に復元できる。また、それら以外にも鉸具の破片や、馬具と思しき形状の破片が数点存在しており、断片的な資料ではあるが、学術的価値は無視できないものがある。

なお、前述の馬具製品と同じ場所に保管されていたものとして、「2 号墳出土」と注記されたカードの入った平根系の鉄鏃 4 点がある。現状では出土地が確定できるものではないが、西宮市史第 7 巻所載の五ヶ山 2 号墳の紹介箇所に類似する資料が掲載されていることから同古墳出土資料である可能性が考えられる（註 3、西宮市役所 1967）。

③尼崎市栗山遺跡表採資料

「栗山表採」と注記に記載された資料群で、尼崎市栗山庄下川遺跡より採取された資料群と考えられる。後述の図面資料報告でも紹介するが、これらの遺物の実測図面をもとに作成されたトレース図が考古研で所蔵されている。

栗山庄下川遺跡は、尼崎市中心部やや西北の庄下川にかかる上生島橋と生島橋の間の川床を中心に広がる遺跡で、標高約 2.2m の沖積地に立地し、弥生～中世の遺物が多く出土している。現時点で確認できる資料は 49 袋分で、弥生土器や土師皿、瓦片や瓦器碗の破片などがあり、非常に多様な年代のものが残されている。



栗山遺跡表採資料

④小野市表採資料

コンテナ1箱分に遺物番号及び「出土地 小野」と注記された弥生土器片及び須恵器片が16袋分存在している。それ以上の注記はないため、小野市内のどの遺跡からもたらされた資料かは残念ながら不明である。

⑤その他

上記以外に、採集された自治体名はわかるが遺跡名は不明なもの、もしくは全く出土地が分からないものがある。

兵庫県内の資料としては、まず「万ライ山」と注記された埴輪片が3点あり、宝塚市の万籟山古墳からもたらされたものと推定される。

それから、「三田」と注記されたコンテナが1箱残されており、兵庫県三田市内で出土・採集された資料群と考えられる。ただし遺跡名を示す注記はなく、出土地は不明である。遺物の内容としては、須恵器片が多く、それ以外にはやや大型の埴輪片やほぼ完形の唐草文軒平瓦、さらには三田青磁の焼型が1点存在する。その三田青磁焼型には「文政九戌春/清兵衛 作」という銘が刻書されており、年代がわかる貴重な資料である。

そのほか、他府県所蔵の資料としては、まず「AKN」や「浅井町北野遺跡」と注記された資料群がある。これは滋賀県浅井町北野遺跡を指し、考古研が調査に携わり、『関



「小野市」注記資料



「万ライ山」注記埴輪片



「三田」注記唐草文軒平瓦



文政9年銘三田青磁焼型

西学院考古』第6号で報告を行っている。遺物の内容をみると、報告されている写真図版と内容が一致しており、この調査によって出土した遺物でほぼ間違いのないであろう。

これ以外の他府県出土・採集の資料を列記すると、大阪府舟橋遺跡採集土器資料、大阪府高槻市安満遺跡採集資料、河内国分（大阪府柏原市か）採集土器資料、奈良市黄金塚東方採集埴輪資料、宮城県縄文土器資料、青森県縄文土器資料などがあるが、いずれも詳しい採集経緯や内容は現時点では不明である。

さらに、注記が全くない資料群がコンテナ約9箱分残されており、中には弥生土器や瓦など、貴重な資料が多く残されており、今後も整理を継続しリストを作成する必要があると考えられる。

図面資料の概要

考古研所蔵図面が作成された遺跡の所在地域は、主に関西学院大学の所在する阪神地域（西宮市・宝塚市・芦屋市・尼崎市）と、同じ兵庫県内の播磨地域（小野市・三木市・加西市）、そして 80 ～ 90 年代に考古研がフィールドワークをおこなっていた近江の湖西地域（元高島市）となっている。

図面は、発掘・測量調査に伴って作成されたもので、その内容は平面図・断面図・土層図・平板測量図などが多く、原図だけでなく原図のコピーやトレース版下（レイアウト図）、トレース図など、報告書作成段階の資料も存在している。また、古い調査に関連する図面としてはコピーの代わりに作成された青焼図面もあり、これらは報告もしくは研究用に保管されていたものと考えられる。

①西宮市

・上ヶ原入組野所在古墳

関西学院大学上ヶ原キャンパスの東方に位置する上ヶ原入組野所在古墳の墳丘及び石室の図面である。原図ではなく青焼図面であり、墳丘は 1953 年 6 月、石室は 1953 年 12 月 16 ～ 17 日と調査期間が明記されている。石室図面には「武藤・飯田」と記載があり、武藤誠氏が調査をおこなったことがわかる。これらの図面については、武藤誠 1959 において報告がなされている。

・関西学院構内古墳

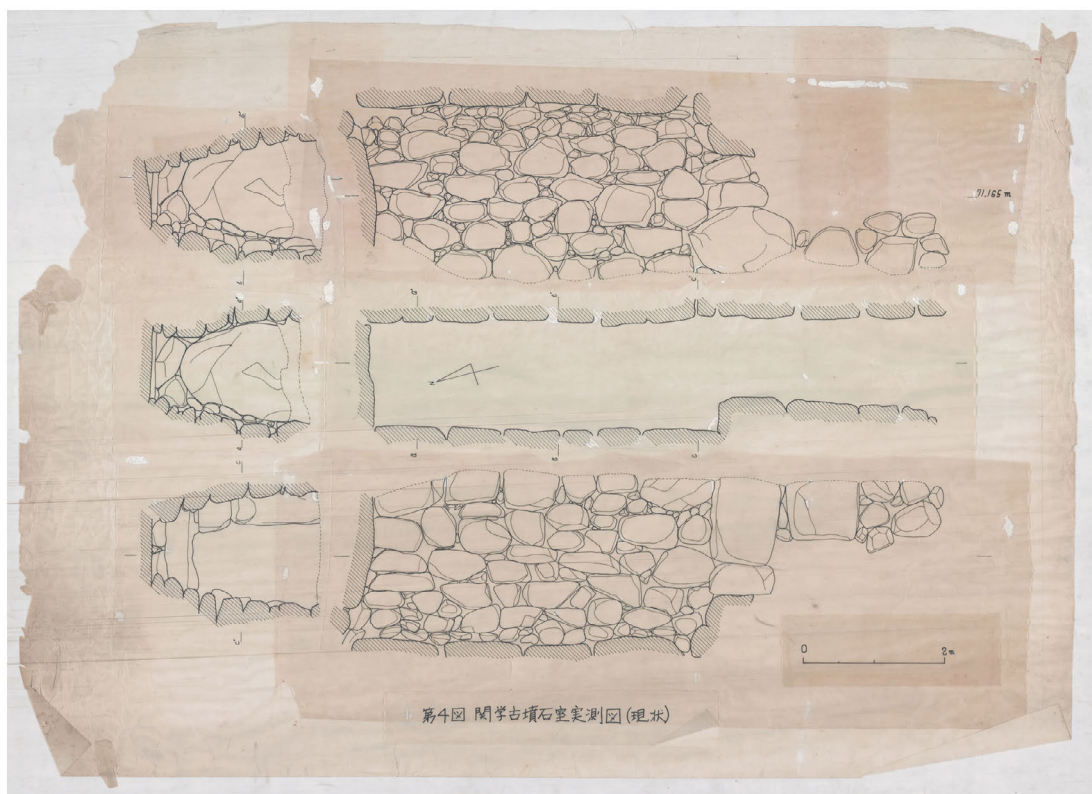
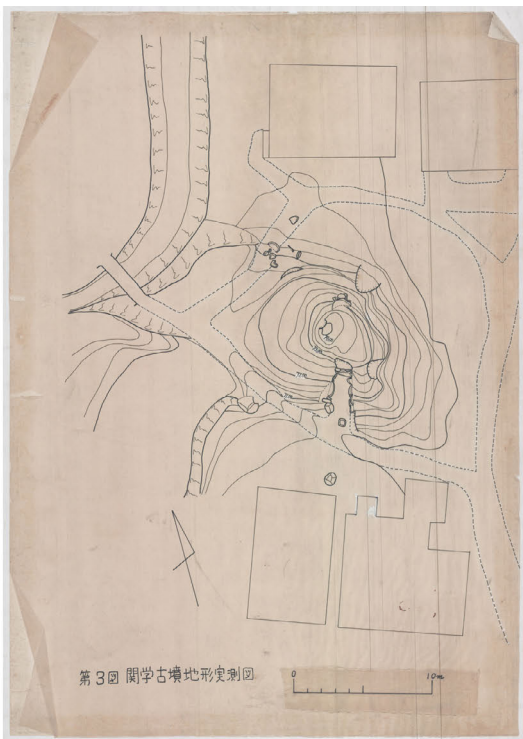
1975 年に『関西学院考古』第 2 号で報告された構内古墳の測量図面の原図が存在している。ただし、調査期間は 1974 年と 1976 年のものが存在しており、後者は報告後に再測量された図面と考えられる。原図だけでなく、トレース図も存在しており、調査から報告までの整理過程がわかるようになっている。

・五ヶ山遺跡

関西学院大学上ヶ原キャンパス周辺に所在する弥生時代の集落遺跡であり、出土遺物も大量に所蔵していた。図面は住居跡のトレース図と遺物実測図の原図が残されており、遺構のトレース図については 1 号住居跡及び 3 号住居跡との記載があることから、昭和 45 年（1970）に考古研が実施した No.4 地点の調査成果物と考えられる。これらは、1975 年に西宮市教育委員会が発行した報告書に掲載されている（西宮市教委 1975）。遺物実測図については報告済の資料かは不明である。

・五ヶ山古墳群

関西学院大学上ヶ原キャンパス周辺に所在する五ヶ山古墳群第 1 ～ 2 号墳の関係図面である。図面種類はトレース図及び青図のみとなっており原図はない。1976 年報告の「仁川流域の後期古墳」『関西学院考古』第 3 号などに使用するために作成された図面類と考えられる。



関学構内古墳測量図面

- ・甲風園所在遺跡

西宮市甲風園で採集された弥生土器のレイアウト図及びトレース図がある。これらの図面は、1978 年の『関西学院考古』第 4 号において報告されている。

- ・苦楽園遺跡分布図

昭和 32 年発行の 1/3000 地図に遺跡の位置がプロットされた図面が 1 点残されているが、いずれの報告の元となったものかは不明である。

②宝塚市

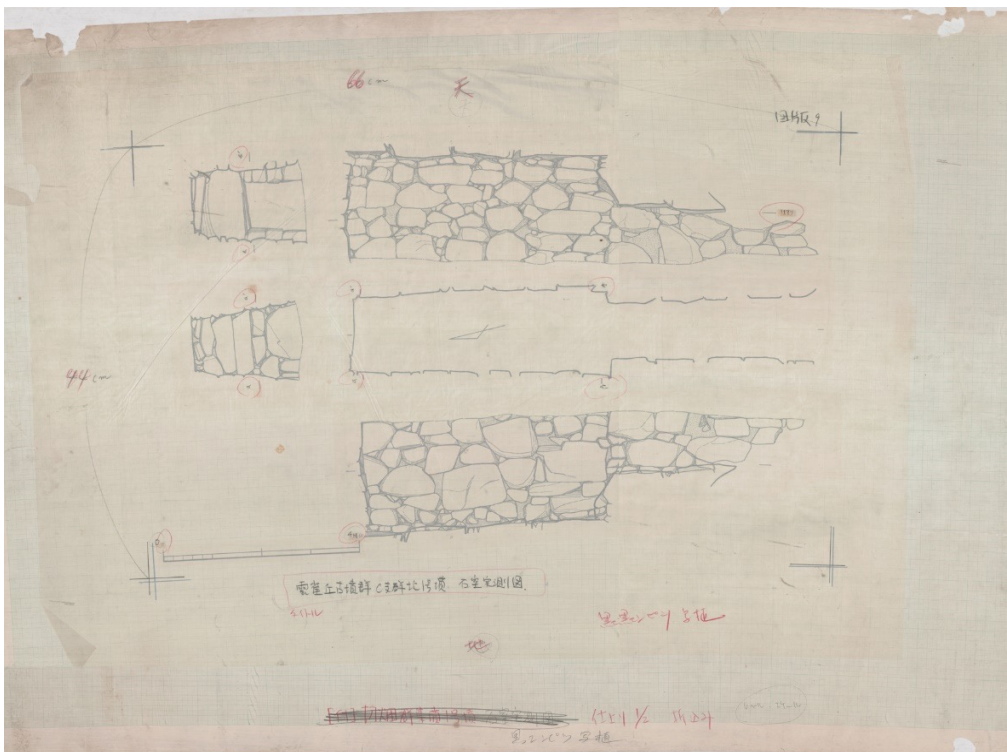
宝塚市関係の図面は、五ヶ山所在の仁川旭ヶ丘古墳群と長尾山丘陵に所在する古墳群の測量調査で作成されたもので、前者は正報告が刊行されており、後者は『関西学院考古』の「長尾山の古墳群」シリーズで報告されている。

- ・仁川旭ヶ丘古墳群

墳丘の平板測量図の原図が 1 点あり、1972 年 3 月 10 ～ 15 日に作成されている。同年に正報告が刊行されており、同図面が掲載されている（仁川旭ヶ丘古墳群調査委員会 1972）。

- ・中筋山手古墳群

長尾山丘陵に所在する古墳群の 1 つで、1・4・5 号墳の石室及び墳丘の測量図がある。1977 ～ 1978 年に測量されたもので、1978 年の『関西学院考古』第 4 号に報告が掲載されている。



雲雀丘古墳群 C 支群北 1 号墳測量図面

・雲雀丘古墳群

長尾山丘陵に所在する古墳群の1つで、非常に多くの古墳で構成されているが、その中でC北支群の1・3・4・6号墳の墳丘及び石室の測量図面が残されている。調査期間はクリニック前古墳(1号墳?)は1975年、それ以外は概ね1978年に行われており、1979年の『関西学院考古』第5号で報告されている。

・天満神社古墳

長尾山丘陵に所在する山本古墳群C支群に属する古墳の1つで、1989年に調査がおこなわれた。所蔵図面は墳丘測量図の原図以外は全て原図コピーである。1991年に『関西学院考古』第9号で報告されている。

③芦屋市

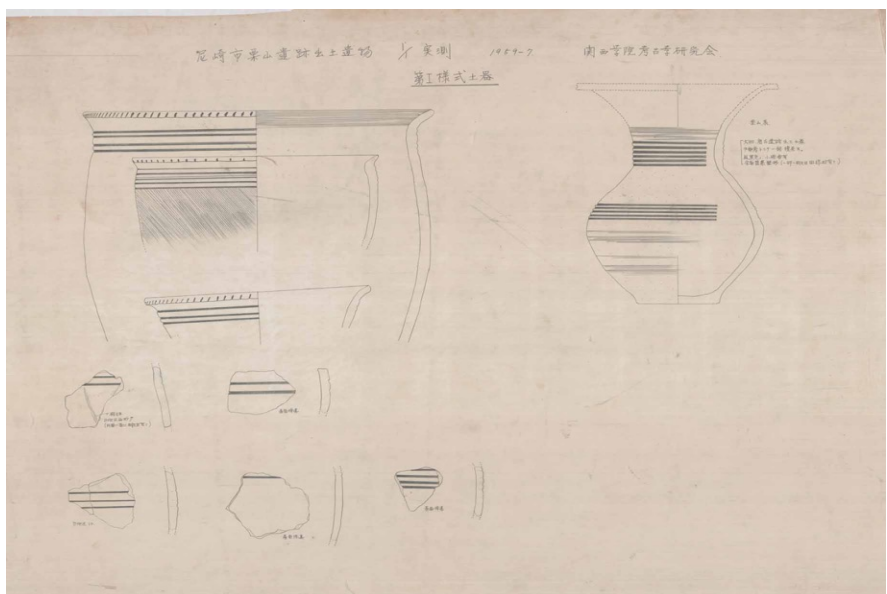
・会下山遺跡

1956年に発見された弥生時代の高地性集落遺跡であり、現在国指定史跡に指定されている。所蔵図面はトレース図1点と青図3点で、1958年に調査された竪穴住居址の図面と1960年作成された竪穴住居址の復元図である。いずれも1964年発行の『会下山遺跡』に所収されている。

④尼崎市

・栗山遺跡

先述した尼崎市栗山庄下川遺跡出土の資料群をもとに作成された図面と推測される。内容は全て遺物のトレース図で「1959年7月」作成との記載がある。本調査の報告は1974年に刊行されており、同様の遺物の図面が掲載されているが、レイアウトや実測図の内容が若干異なり、所蔵図面がそのまま利用されているものではない。そのため、所蔵図面は何らかの理由で考古研が独自に作成したものと考えられるが詳細は不明である。



栗山遺跡出土遺物実測図面

⑤三木市

・志染経塚

三木市志染町窟屋高男寺に所在する経塚で、「高男寺経塚」とも称される遺跡である。明治 17 年（1884）に村人がため池の修繕を行っていたところ、高男寺跡から法華経や仏具を収納した埋経筒が発見された。現在、この経筒は兵庫県立歴史博物館に寄託されており、兵庫県指定文化財となっている。

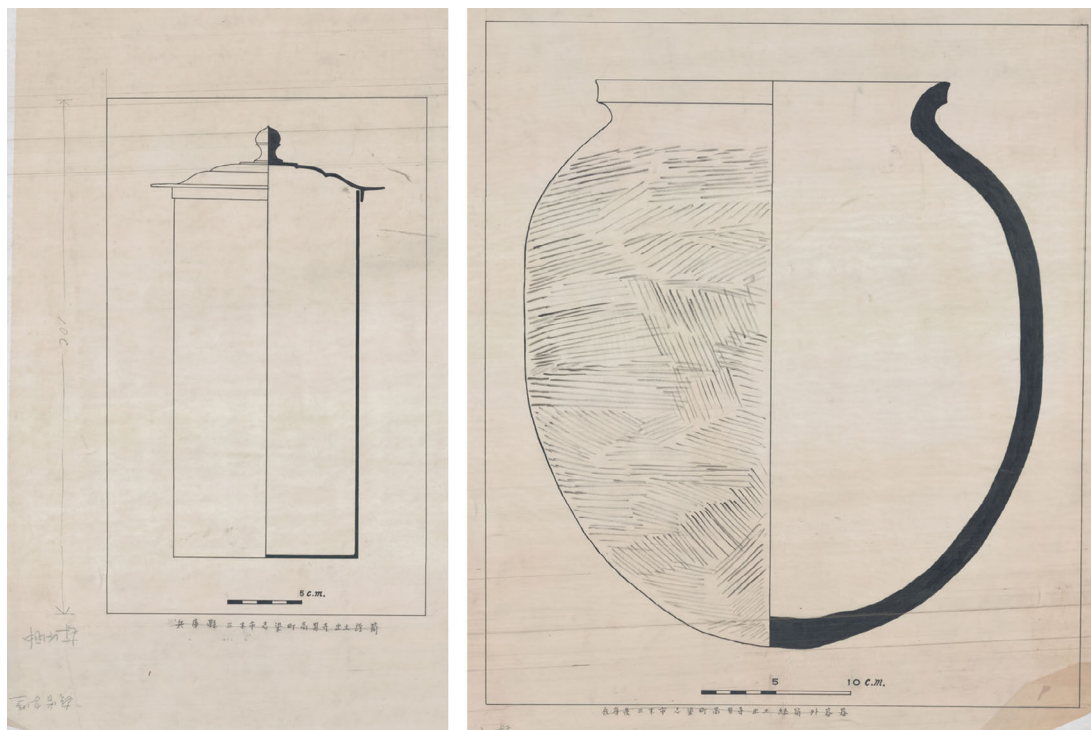
所蔵しているのはこの経筒の実測原図及びトレース図であるが、作成に関する注記は見受けられず、年月日や実測者は不明である。

これらの資料は、武藤誠 1964 での報告図版に使用されており、本稿執筆のために作成されたものと考えられる。稿中の記載によると、当時武藤氏が兵庫県文化財専門委員を務めておられた関係で経塚出土資料の調査を依頼され実施したとのことで、破損していた経筒埋納陶器壺を研究会会員によって復原をおこなったとも記載されている。よって、これらの図面もそうした調査の一環として研究会会員の手によって作成された可能性が考えられる。

⑥加西市

・周遍寺山古墳群

1958 年に調査された古墳で、所蔵されているのは 1 号墳の測定の青図である。加西市史などで報告がなされている。



志染経塚出土遺物実測図面

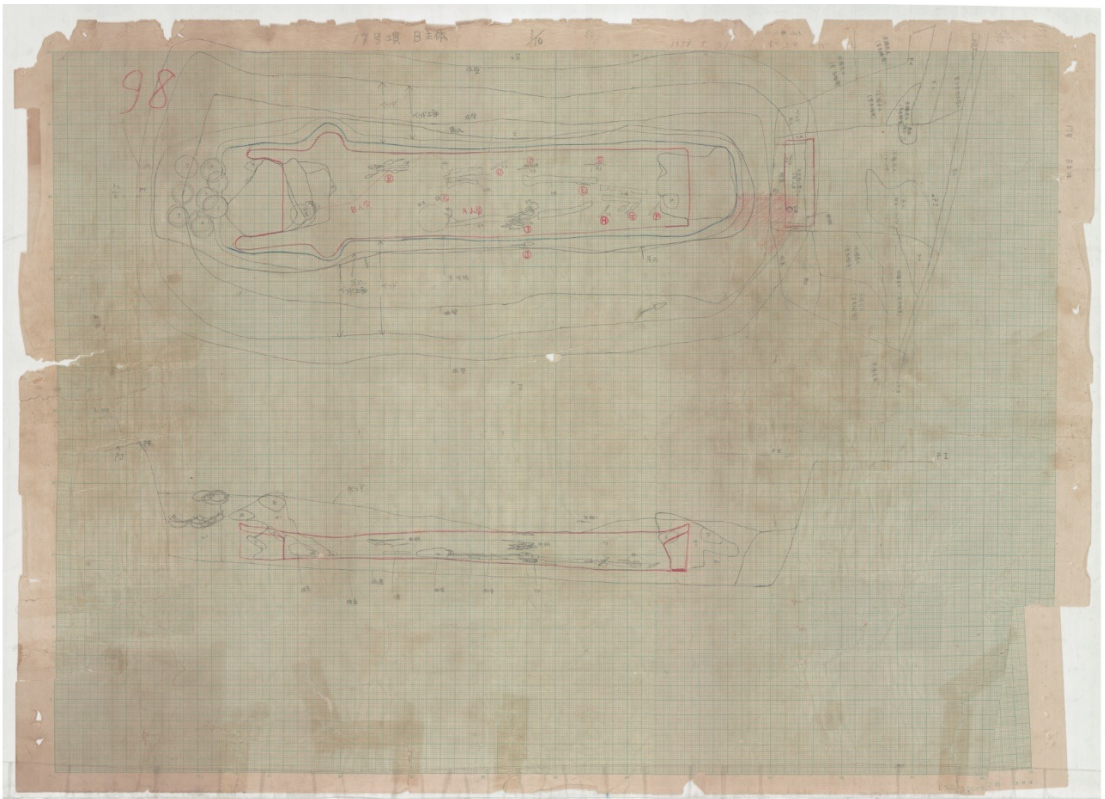
⑦小野市

・焼山古墳群

この古墳群は1958年に調査されたもので学史上非常に重要な調査として位置づけられている。ただし、その成果はほとんど公開されておらず、その一部が『小野市史』などに報告されているのみである。考古研で所蔵しているのは、3・4・17・19・21号墳の調査に関する図面で、3号墳以外は埋葬施設の遺物出土状況図がある。これらのほとんどは未報告の原図であり、なおかつ遺物の詳細な出土状況が記載されていることから、学術的価値は非常に高いものと考えられる。これらが考古研で所蔵されていた詳細な経緯については不明であるが、当時の焼山古墳群発掘調査団の団長を務めたのが武藤誠氏であり、武藤氏と考古研会員がその後の報告に何らかに関わる予定でもたらされた可能性が考えられる（神戸新聞社社会部編 1958）。

・小野王塚古墳

播磨地域を代表する中期古墳であり埋葬施設から銅鏡・甲冑・刀剣類などの貴重な遺物が出土している。所蔵しているのは埋葬施設の図面でいずれも原図である。2006年に遺物の整理報告書が刊行され、出土状況図も所収されている（小野市教委 2006）。



焼山17号墳B主体部実測図面

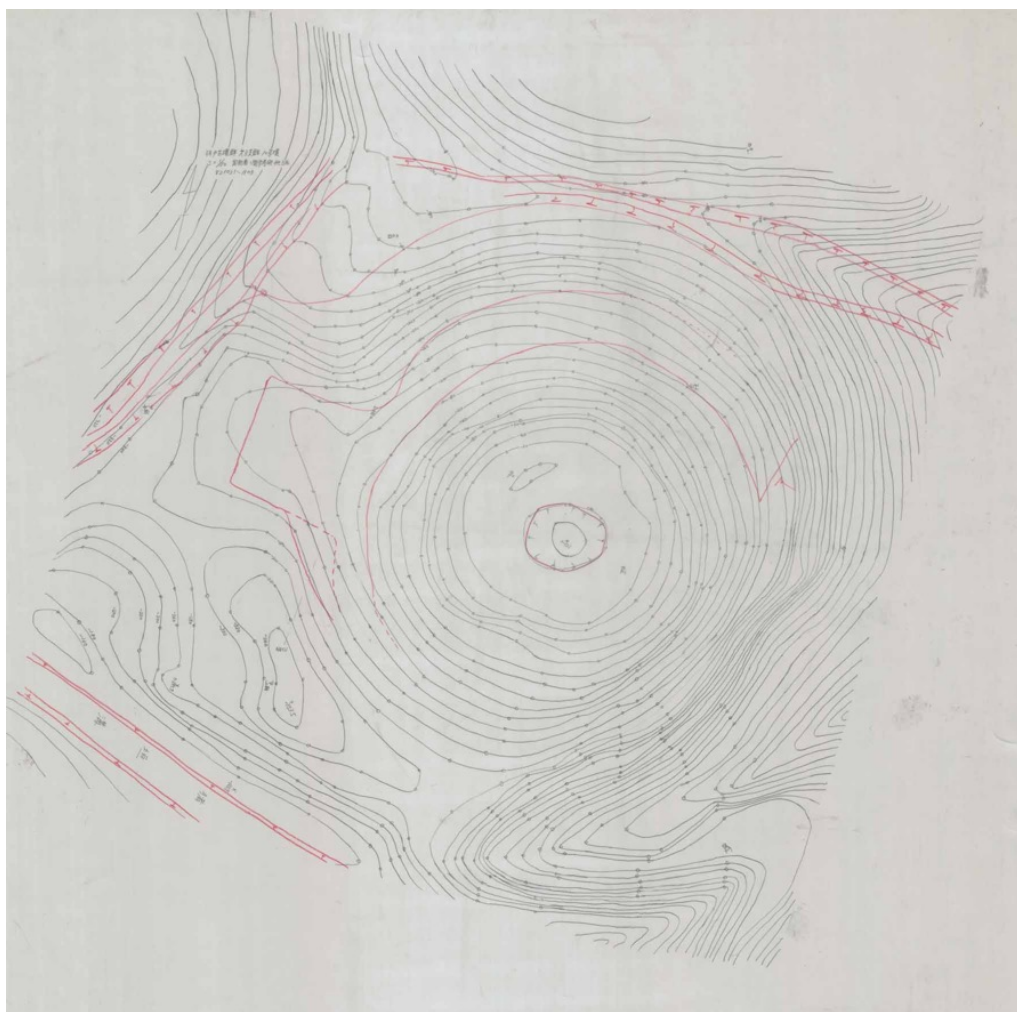
⑧高島市

・鴨稻荷山古墳

墳長約 50 mを測る前方後円墳で滋賀県指定史跡となっている。大正 12 年に剝拔式家形石棺が発掘されており、所蔵しているのは発掘後に現地で保存されている家形石棺の実測図である。家形石棺の図面は各種研究論文で公表されている。1978 年 11 月、考古研が滋賀県技師兼康保明氏と高島町教育委員会の協力のもと古墳の現況測量を実施した際、家形石棺も実測された。

・拝戸古墳群

1991 年に第 2 支群第 1 号墳が、1992 年に第 3 支群第 5・6・7・8・10 号墳と第 4 支群第 3 号墳の調査がおこなわれた。いずれも墳丘及び横穴式石室の測量調査であり、その際に作成された原図が所蔵されている。調査の成果は、1987 年刊行の『関西学院考古』第 8 号に第 3 支群第 10 号墳の報告が掲載されている。



拝戸古墳群第 3 支群第 10 号墳墳丘測量図

・白髭神社古墳群

1988年に1号墳の墳丘及び石室の測量調査がおこなわれ、その際に作成された実測図の原図が所蔵されている。1991年の『関西学院考古』第9号に掲載の報告において所収されている。

・音羽古墳群

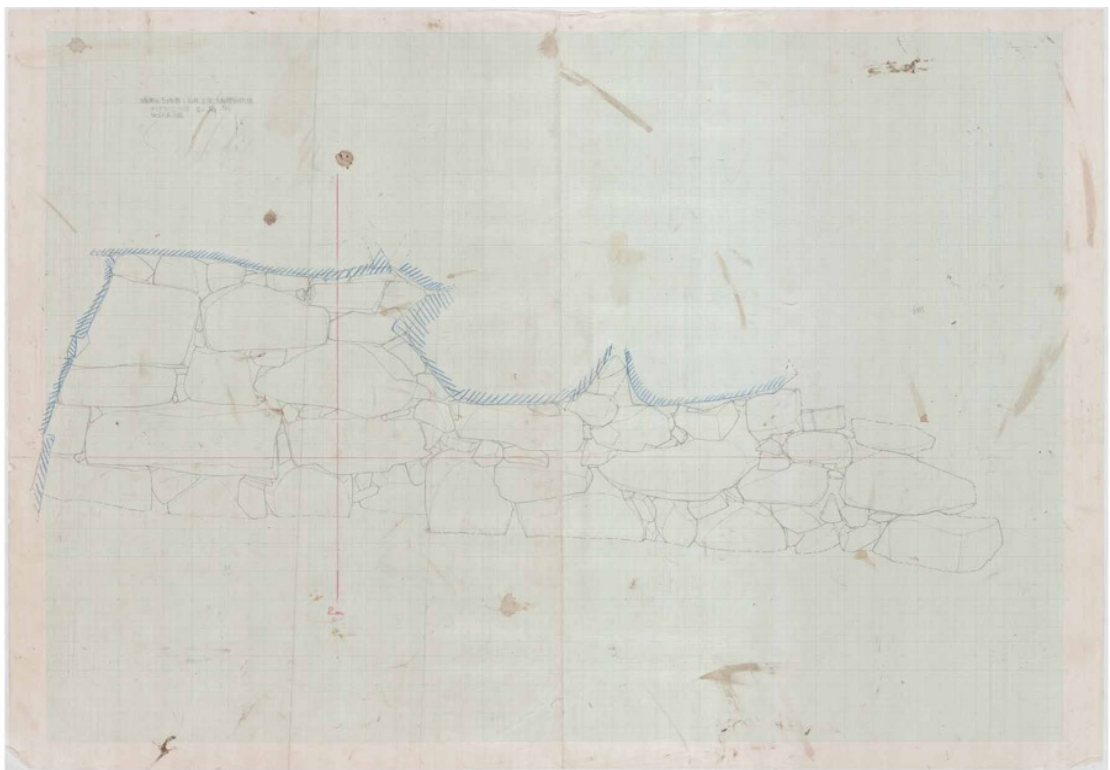
高島市音羽に所在する約50基からなる古墳群で、1号墳の横穴式石室の実測原図が残されている。注記から1992年9月に調査がおこなわれたことがわかる。

・坂畑古墳群

注記には「阪畑古墳群」と記載されているが高島市鶴川に所在する坂畑古墳群のものと考えられる。1号墳墳丘の平板測量図が1点のみ残されているが、注記がほとんどないため、調査時期などは不明であり、未報告資料と考えられる。

⑨その他

注記がほとんどないため遺跡名が不明の土層図の青図が2点存在している。いずれも体裁がほぼ同じであることから同じ遺跡の調査で作成されたと考えられる。遺跡名の特定作業として、1970年11月に調査されたことが注記されており、考古研の調査年表と照合すると、西宮市甲山山頂銅剣出土地点か川西市加茂遺跡（市道11号線）の調査である可能性が考えられる。



白髭神社古墳石室実測図

所蔵図面からみる考古研の活動状況

ここでは所蔵している図面資料の学術的価値について若干の私見を述べたい。なお、残されている図面の内、青焼図面については実際の調査への関わりと関係なく、学術目的で入手した可能性があるため、対象から除外して検討したい。その上でまず、所蔵している原図及びトレース図関係を、作成された調査の内容によって分類してみると以下のようなになる。

A. 武藤誠氏調査関係の図面

B. 考古研の事業として実施し、『関西学院考古』において報告された調査関係の図面

C. 各自治体主体の発掘調査及びその報告に関連する図面

まず、Aに該当するのは、①の上ヶ原入組野所在古墳や、⑤の志染経塚、⑥の周遍寺山古墳群、⑦の焼山古墳群などで、概ね1950～70年代の考古研発掘以前からの調査に関するものがほとんどである。この中では特に焼山古墳群の未報告図面類から得られる情報は非常に多く、今後の活用が期待される。

次に、Bに該当するのは、①の関学構内古墳や、考古研が長年調査のフィールドとしていた②宝塚市の長尾山丘陵の古墳群と、⑧湖西地域（高島市）の古墳群に関する図面類で、ほとんどは『関西学院考古』で報告されているが、高島市の拝戸古墳群や音羽古墳群など調査図面の一部は未報告であると考えられ、今後地元自治体などで活用されることを期待したい。

最後に、Cに該当するのは①の五ヶ山遺跡、②の旭ヶ丘・五ヶ山古墳群、④栗山遺跡などがあげられ、会員が発掘調査及び整理作業に参加し、報告書作成を補助した関係で残された図面類と考えられる。中でも五ヶ山遺跡の調査は考古研黎明期の重要な関係事業であったと考えられ、会史を紐解く上でも重要な資料であると思われる。

このように、考古研所蔵資料は遺物類だけでなく図面類についてもさまざまな面から価値づけが可能であり、今後、各自治体に移管するにせよ、考古研で保管するにせよ、永く後世まで残していくべき文化財資料であると考えられる。

小結～残置資料の今後の活用に向けて～

関西学院大学には専門講座が存在しないことから、ここで紹介した残置資料は学内唯一の所蔵考古資料であると考えられる。そのため、その教育的価値を鑑みたときに、学内において文化財資料の取扱について学ぶ授業（歴史関係の史料講読や学芸員課程関係の講義 etc.）において、非常に有効な教材となりうるのではないかと考える。今後、これら資料の情報を学内の教員などに周知した上で、授業への活用を検討する余地はないだろうか。

また、大学内の団体が関与した調査によって取得した資料群という側面もあることか

ら、大学史を構築する上でも重要な情報を提供するものであり、学内全体においてもこうした資料群の存在を周知する必要があると考える。具体的には、学内のしかるべき施設において資料を一定期間展示し、学生や一般客に観覧していただくなどの手段が考えられ、そのための関連機関との連携についても考慮するべきである。

なお、これら残置資料を今後の保存活用する上で考慮すべき点として、鉄製品類の保管環境の整備があげられる。残置された鉄製品類については、現状、市販のタッパーに簡易な梱包を施した上で収納し保管されていることから、今後状態の悪化が高い確率で見込まれる。そのため、保存処理をおこなうか、もしくは環境が安定した保管設備にて保存されることが望まれる。

【註釈】

註1 当古墳の情報については岡野慶隆氏よりご教示いただいた。

註2 C37号墳という注記については、雲雀山西尾根B2号墳を旧名称A37号墳と呼んでいたことと関係するのではないかとこの情報を岡野慶隆氏よりご教示いただいた。また人骨の出土地については、上記古墳から出土していないことから、記録上出土が伝えられる雲雀丘古墳群C南1号墳の資料ではないかとこの情報も合わせてご教示いただいた。

註3 註1と同じ。

【参考文献】

尼崎市教育委員会 1974『尼崎市域発掘調査報告書 昭和25～38年』

小野市教育委員会 2006『小野王塚古墳出土遺物保存処理報告書』小野市文化財調査報告27

折井千枝子・坂井秀弥 1978「西宮市甲風園採集の弥生式土器」『関西学院考古』第4号、関西学院大学考古学研究会

関西学院大学考古学研究会 1975「構内古墳現状遺物報告」『関西学院考古』第2号

関西学院大学考古学研究会 1976「仁川流域の後期古墳」『関西学院考古』第3号

関西学院大学考古学研究会 1978「長尾山の古墳群(I)－中筋山手古墳群－」『関西学院考古』第4号

関西学院大学考古学研究会 1979「長尾山の古墳群(II)－雲雀丘古墳群－」『関西学院考古』第5号

関西学院大学考古学研究会 1979「高島郡高島町鴨稲荷山古墳現状実測調査報告」『滋賀文化財だより』22 財団法人滋賀県文化財保護協会

関西学院大学考古学研究会 1980「長尾山の古墳群(III)－雲雀山西尾根古墳群－」『関西学院考古』第6号

関西学院大学考古学研究会 1987「滋賀県高島郡拝戸古墳群第10号墳現状調査報告」『関西学院考古』第8号

関西学院大学考古学研究会 1987「長尾山の古墳群(IV)－雲雀山西尾根古墳群－」『関西学院考古』第8号

関西学院大学考古学研究会 1991「長尾山の古墳群(V)天満神社古墳」『関西学院考古』第9号

関西学院大学考古学研究会 1991「滋賀県高島郡高島町白鬚神社古墳群」『関西学院考古』第9号

宝塚市教育委員会 1991「雲雀山西尾根古墳群 発掘調査報告書－B支群の調査－」『宝塚市文化財調査報告』第26集

岸本直文 1997「焼山古墳群」『小野市史』第4巻史料編Ⅰ、小野市

神戸新聞社社会部編 1958「後期古墳の性格―焼山群集墳を中心に―」『祖先のあしあと』Ⅳ

仁川旭ヶ丘古墳群調査委員会 1972『仁川旭ヶ丘古墳群調査報告』仁川旭ヶ丘古墳群調査委員会

西宮市教育委員会 1975『仁川五ヶ山弥生遺跡― No.4 地点の調査報告―』西宮市文化財資料第14号

菱田哲郎 2010「周遍寺山遺跡」『加西市史』第7巻史料編1考古、加西市

藤原光平・真田陽平 2007「資料紹介 関西学院大学考古学研究会所蔵資料」『関西学院考古』第10号

武藤誠 1959「西宮市上ヶ原入組野在横穴式石室古墳の発掘」『関西学院史学』5号

武藤誠 1964「兵庫県三木市志染町出土の経筒と埋納経典」『人文論究』14-4

村川行弘・石野博信 1964『会下山遺跡』芦屋市文化財調査報告第3集、芦屋市教育委員会

西宮市役所 1967『西宮市史』第7巻 資料編4

考古研所蔵図面一覧表

自治体名	遺跡名		図面種類・内容	点数	参考文献
西宮市	上ヶ原入組野所在古墳		墳丘・石室測量図	2	武藤誠1959
	関西学院大学構内古墳	-	墳丘・石室測量図	15	関西学院大学考古学研究会1975
	仁川流域の後期古墳	-	古墳分布図	1	関西学院大学考古学研究会1976
	五ヶ山遺跡	-	第1号住居址実測図	6	-
	五ヶ山古墳群	1号墳	遺物・石室測量図	2	関西学院大学考古学研究会1976
		2号墳	遺物（土器・石棺材・鉄器）実測図、墳丘測量図	5	
	甲風園遺跡	-	採集遺物実測図	2	折井千枝子・坂井秀弥1978
宝塚市	苦楽園遺跡	-	-	2	-
	仁川旭ヶ丘古墳群	第1・3号墳	墳丘測量図	1	仁川旭ヶ丘古墳群調査委員会 1972
	中筋山手古墳群	古墳群分布図	-	1	関西学院大学1978
		第1号墳	石室測量図	1	
		第4号墳	石室測量図	1	
		第5号墳	墳丘・石室測量図	2	
	雲雀丘古墳群	クリニック前古墳（C北群1号墳）	墳丘測量図	1	関西学院大学考古学研究会1979
		C北群3・4・6号墳	墳丘測量図	1	
		C支群北1号墳	石室測量図	1	
		C支群北3号墳	石室測量図	2	
		C支群北4号墳	石室測量図	2	
	天満神社古墳	-	墳丘・石室測量図	8	関西学院大学考古学研究会1991
芦屋市	会下山遺跡	-	平面図	4	村川行弘・石野博信1964
尼崎市	栗山遺跡	-	遺物実測図	9	尼崎市教育委員会1974
三木市	志染経塚	-	遺物実測図	5	武藤誠1964
加西市	周遍寺山古墳群	第1号墳	墳丘・主体部実測図	4	菱田哲郎2010
小野市	焼山古墳群	3号墳	墳丘・埋葬施設測量図	1	岸本直文1997
		4号墳	墳丘測量図	13	
		17号墳	A主体部実測図	13	
		19号墳	墳丘測量図	8	
		21号墳	墳丘測量図	20	
	小野王塚古墳	-	埋葬施設実測図	4	小野市教育委員会2006
高島市	鴨稻荷山古墳	-	石棺実測図	1	-
	白髭神社古墳群	第1号墳	墳丘・石室測量図	12	関西学院大学考古学研究会1991
	拝戸古墳群	第2支群第1号墳	墳丘・石室測量図	7	-
		第3支群第5号墳	墳丘測量図	1	-
		第3支群第6号墳	墳丘測量図	1	-
		第3支群第7号墳	墳丘測量図	1	-
		第3支群第8号墳	墳丘測量図	1	-
		第3支群第10号墳	墳丘測量図	2	関西学院大学考古学研究会1987
		第4支群第3号墳	墳丘測量図	1	-
	音羽古墳群	1号墳	石室測量図	5	-
	阪畑古墳群	1号墳	墳丘測量図	1	-
不明	西宮市甲山山顶銅剣出土地点or川西市加茂遺跡（市道11号線）	-	-	2	-